

矢来 篝

1. 2×××年×月×日

宇宙人がやってきたのは、もう一年も前のことになろうとしていた。猫がにやーと鳴くのは、古今東西あらゆる文明において真つ当なことであり至極当然のことであるが、彼らはそうだった普通のことを、いとも容易く奪い取っていった。

もちろん抵抗した国もいたし組織もあった。

どこかの世界随一の軍事大国は、まるで猫をいたぶる犬を止める勇敢なネズミのように彼らと戦った。ある地域の経済連合も果敢にそれに続いた。それ以外の国と地域もいろいろな方法で彼らを打ち破ろうとした。

だが、それは失敗に終わった。彼らの方が一枚も二枚も上手だった。我々は、すっかり敗戦星の住民へと成り下がってしまった。

「おーい、宇宙人が来たぞー、宇宙になれ！」

やれやれ、宇宙人が来てしまった。今日の文筆作業も終わりでしょう。まだ私は宇宙になりたくない。

2. 2×××年×月○日

ところで私は宇宙人と同居している。そうしたら私の古い友人たちは何の反応も示さないだろう。彼らは、使い古しのオモチャを目の前にした猫のようにそっぽを向いて黙るだろう。にやーともいんやんとも言わないだろう。

彼らは冷たいのだ。

そんな薄情なヒトよりも、私は宇宙の方が好きだ。

何よりも彼らは非常に熱い。私が常々持っている猫に対する愛情に匹敵するくらい熱い。彼らの熱量のせいで地球温暖化は飛躍的に進んだのではないかと私はひそかに思っている。絶対に彼らには言えないけれども。

「おーい、宇宙人が来たぞー、宇宙になれ！」

やれやれ、宇宙人が来てしまった。今日の文筆活動も終わりでしょう。まだ私は宇宙になりたくない。

3. 3×××年×月□日

神は死んだ。

遠い昔の哲学者だか何だかは、そう言った。

そして私は神を信じている。

この二つの事項は一見、相反しているように見えるかもしれない。しかし、おそらく、これらは両立しえるはずだ。

ならば、このようにも言えるのではないだろうか。

猫は生きている。

私は、そう言った。

そして宇宙人は猫を信じていない。

やれやれ。